

テーマ名

観光地ゆえに地元の人々にも『親しまれ、信頼される門前町』を目指して

～商いの道、それは先代の人々の想いを大切に伝えること～

氏名：藤井 智香子

鈴木 達也

松山 和雄

藤井 雅大

佐藤 勝亮

都築 享一

(表参道発展会)

(要 旨)

私達の町は特別な町でも、特別な人の集まりでもありません。

泣いたり、笑ったり、悩んだり・・・

はじめからできないと思い、何もしないのは簡単ですが、私たち門前町は今、日々の生活の中で、自分の道を商売という道のりをただひたすらやればできると信じ精進しております。元気な商人道を目指しましょう。

目 次

1. 『はじめに』	3
2. 民話『豊川稲荷と平八郎釜』より	3
3. 『女将さん会からの提案』	4
4. 『まちづくりの契機』	4
5. 『いなり楽市の様々な挑戦』	5
6. 『いなり楽市の組織体系』	6
7. 『まちづくり会社設立』	7
8. 『地域ブランドとしてのいなり寿司』	8
9. 『若者が町に寄せる思い』	8
10. 『まちづくりは十年スパンで』	9
11. 『まちづくりの課題』	10

1. 『はじめに』

現在、全国で商店街として生き残れるのは全体の一分と二分とも言われています。その中で観光地として成り立っている門前町だからこそまだなんとか生かされているのだと思います。しかし、時代の流れの中で何も仕掛けをしないでいけば必ず衰退への道を歩むこととなります。

今、必要な事は時代の流れに乗り、流れを観ることです。その事を理解し、行動する人がいる街『とよかわ』。

そんな人々の想いをまとめてみました。

2. 民話『豊川稲荷と平八郎釜』より

昔々、東海義易禅師という大変立派なお坊さんが仏教を広め、豊川の人々を救いたいとお寺（現在の妙厳寺）を建てることにしました。

ところが、お金も資材も働いてくれる人もなく大変困っておりました。

そんなある日、小さな釜を腰に下げた、粗末な身なりのおじいさんが

『平八郎と申す者ですが、あなた様のお手伝いがしたくやってまいりました。』

と、それからずっと朝早くから、夜遅くまで平八郎は禅師様の下で働きました。

そしてある時、平八郎は飯炊きを頼まれると、家にあったわずかな米を小さな釜に入れ、あつという間に数十人分の飯を炊き上げてしまったのです。

貧しい時代に禅師様はたいそう喜ばれ、話を聞き集まった人たちにふるまいました。

そんな日が続きしばらくすると、

『この間にご馳走様でした。お礼にお米を持ってきました。』

そう言って人々が平八郎の釜にお米を入れるようになり、平八郎はそのお米を残らず炊いては、禅師様に差し上げました。

そんなことが何回も続くうち、こんなうわさが広がり始めました。

『豊川に行けば立派な禅師様のお話が聞け、そのうえ腹いっぱい飯を食べさせてもらえるそうだ。』

噂は広まり、遠くからも人が集まるようになり、再びこの地を訪れる時はみな必ず感謝の思いを込め平八郎の釜にお米を入れ、人々の想いがこの豊川の地に集まり、ついには立派な社が建ち豊川稲荷と呼ばれるようになり、その名を全国に知られるようになりました。

3. 『女将さん会からの提案』

ご縁をいただき、門前に嫁に来ることができました。

嫁いできて、商売をしながらの子育て、祖父母、親との対立など尽きない悩みも、だれもが一度は通る道、覚悟はできていたけれど・・・

でも、考えてみれば今までの人生より、これから先の長い人生を、より一層楽しい日々で過ごしたいとの思いから会を設立しました。最初は商売こそライバルではありますが、近所の嫁さん同士が仲良くできること、子供のこと、親のことなど同じ悩みを分かち合えることを原点に考え、会議、ご祈祷など共通点を共有できることに重点を置き行動しました

そしてある時、東京におかみさん会（浅草おかみさん会）があることを聞き、同じ思いを持っている人たちが私たち以外にもいることを大変うれしく思いました。そして、交流が始まり少々先輩ということもあり、色々な事を教えて頂きました。女性だからこそできること、女性でなければできないことなど、少しでも町の為にできることがあることを確信しました。元気な人は大勢いる、まだまだ私も負けられないと、全国のおかみさんサミットにも出かけ、多くの仲間と出会うことができました。

そして、活動をする中での限界を感じる時もありました。地域は一つ、思いのある者が集まれば何かができると思いました。現在、お月見夜曲と題し観月会を企画運営しております。おかみさん会だけではなく、まちづくりに携わるいろいろな団体・人々と一緒に盛り上げています。

ちょうど今、イベントを通し門前が変わる時、変えることができる時、皆の力をまとめることの大切さ、応援することの大切さ、必要性を感じています。そして、住んでいる人々が住みやすく、訪れてもよい町になる為に何が提案できるのかを検討しております。町を大好きになることこそが、ここ豊川の地の活性化に繋がると思っています。これからも『豊川大好き人間』を一人でも多く集め、女性ならではの発想を提案、行動していきたいと思えます。

4. 『まちづくりの契機』

民話にもあるように私たちの街は豊川稲荷の真ん前で、観光を中心としずっと栄えてきました。そんな豊川にまちづくりの契機が訪れたのは、ここ数年の年間観光客数の減少による衰退化です。

かつては豊川稲荷という観光資源のおかげもあって、年間約 600 万人もの人が豊川

の地へ足を運んでくれていましたが、若い世代の信仰心の薄れや、レジャーの多様化など色々な要因が重なり、来客数は今までの 1/3 までに落ち込んでしまいました。また、その多くが正月期に偏っている為、1~2 月は観光地らしい賑わいもあるのですが、それ以外の月は地元の人がちらほらとしか歩いていないという閑散とした悲惨な状態が続いていました。

しかしそんな状況の中、地元も行政も何もしなかったわけではありません。景観整備を中心としたワークショップも毎週のように開催され、検討を重ねてきました。ただ会合が重なるにつれ、お金のかかるハード整備事業に疑問を持つ者も現れ、出席者の数も回を追うごとに減っていきました。

実際、景観整備を行い立派な街並みができたが、賑わいはその時だけでその後は莫大な借金だけが残ってしまったという事例も耳にしました。そこで私たちが目指したのは、ハード面での集客ではなく、ソフト中心での集客でした。多額の資金を必要としないイベントを中心に、『できることから始めるまちづくり』を合言葉に、気長に商店主たちの意識改革を目指しました。

5. 『いなり楽市の様々な挑戦』

いなり楽市は基本的に正月の 1~2 月を除く、閑散期の毎月第 4 日曜に開催されています。まず、開催にあたり私たちが行政にお願いしたのは、補助金などの金銭的な援助ではなく、週一回の会合への参加、イベント当日のお手伝い、さらに行政でしかできない側面的な支援でした。

その一つが平成 16 年度に認可の下りた『地域再生計画』の支援措置で市営駐車場から豊川稲荷までの約 400 メートルの間の、いわゆる門前通りと呼ばれる約 200 メートルの区間を車両通行止めにしてのイベント開催が可能となりました。

イベントの一番のメインが『元気軒下戸板市』で、古い町並みを生かしながら、商売の原点に戻るということで、奥三河から払下げてきた戸板を各店に配り、既存のワゴンではなく戸板の上で商売をしてもらうというスタイルです。

販売する商品もイベント開催時は、仕入れルートの確保ができれば本来の業種以外の商品の販売も可能で、他店とのバッティングも OK、お客様優先のまさに自由市の形態を取っております。

また、道路が有効利用できるということで各種大道芸も盛大に行うことができるようになりました。イベントスタート時、大道芸人のギャラは幕の内弁当一個、10 年が

経過した今でもわずかな謝礼しか出せないのですが、当初 2~3 組だった大道芸人も、回数を重ねるごとに『豊川稲荷門前でおもしろいことやってるよ。』といううわさがどんどん広がり、今では全国から大道芸人が集まるようになってきました。まさに、民話『豊川稲荷と平八郎釜』です。

そして、地域再生計画支援措置その 2 は市営駐車場の目的外使用です。

市営駐車場を行政の協力で無料開放して頂き、フリーマーケットやその他の行事など開催しています。また、イベント開催時の駐車料金もすべて無料という減免措置を受けています。

さらに、資金を必要としない景観整備の一つに『レトロまちかど博物館』があります。私たちの街は幸か不幸か住人も建物も何十年と変わらず現在に至っており、古いものならいくらでもあるということを逆手にとって実行した景観整備がレトロまちかど博物館です。今では使わなくなって、お蔵入りしてしまったものをイベント開催時のみ店先に展示してもらいました。一日限定で展示したにもかかわらず、来場者には大変人気があり、さらには素通りしがちな観光客の足止め効果もあるということで、今では約半数ほどの店舗が常設展示をしています。さらには私たちのまちづくりに共感してくれた豊川市在住の日本一のホーロー看板コレクターの方が、無償でコレクションの一部を提供してくださり、現在約 150 枚のホーロー看板がレトロな町の景観の一つとなっています。

また、資金を必要としないソフト中心のイベントで商店主が何かできないかと思いついたのが、自らがイベントや各店舗の広告塔になる『ちんどん屋』の結成です。楽器すら持ったことのない素人集団で始まったちんどん屋ですが、珍しさから色々なメディアで取り上げてもらうことができ、今ではアマチュアカメラマンの追っかけができるほどのいなり楽市の顔となっています。

そして私たちは行政以外にも、地元の保育園・小・中学校さらには高校、大学と広くイベント参加を呼びかけました。子どもの参加により両親はもちろんおじいちゃん、おばあちゃんさらには親戚までと幅広い年齢層の方が門前に集まりだし、イベント開催時には約 1~2 万人の集客があり月一回ではありますが、かつての賑わいが戻りつつあります。

6. 『いなり楽市の組織体系』

徐々に賑わいを戻しつつあるまちづくりで特徴的なのが、実行委員会の組織体系で

す。イベント発足当初は後継者不足や、門前通りに面していない店舗の参加は不可などおかしな会則があり、もともと40店舗ほどで構成されていた会員店舗も27店舗まで減少していました。そこで私たちがまず改革したのが規約の見直しです。町を活性化したくても、会員にすらなれないというおかしな会則を取り払うことで他地区からの参加者も増え、現在は会員数約50店舗、イベント開催時には近隣の市町や他県からの参加もあり、約70～80店舗でイベントをこなしています。

実行委員会は三役並びに四つの部会から構成されていますが、特徴的なのはあえて責任のある部署はすべて20～40代前半のいわゆる若手で構成されており、先輩方にはあえて補佐役という形で下についてもらい、若手のやる気とイベントへの参加意識の向上を図っています。

7. 『まちづくり会社設立』

月に一度ではありますが、イベント開催時にはそれなりの賑わいが戻り、住人の意識も徐々に変わり始めてきました。ただ、イベント以外の日にも通りに賑わいを、そして町の情報発信ができないかと起ち上げたのがまちづくり会社『そわか』で、住民37軒からの出資金をもとに行政の補助金を一切投入しない純民間のまちづくり会社を設立しました。

当初、行政からの補助金や第三セクター方式をとるのアドバイスも頂きましたが、行政を絡めると自分たちの思ったことができなくなるということもあり、援助はお断りし純民間としてスタートしました。

まず、まちづくり会社の必要性ですが、今までは本業の合間を縫って行っていたボランティア的な活動が、専任的な活動になり、やったものが報われる成果主義が実現が可能になり、既存の商店街の枠を超えたまちづくりを可能としてくれます。

法人名の『そわか』とは元々『円満』とか『幸あれ』という意味の仏教用語で、お稲荷さんのお参りも『オン シラバッタ ニリウン ソワカ』を21回唱えるのが正式な作法となっています。そこから、会社に来た人も経営する私たち自身の幸せにとの思いから社名としました。そして、そわかを『いっぷく亭』という愛称でスタートさせました。

主な事業は無料休憩所としてのトイレと休憩スペースの提供、喫茶コーナー、文化事業としての部屋貸し、定期的な興行などで、観光客以外にも地元のコミュニティーの場として提供しています。また、福祉ショップとの連携で障害者施設の商品をPRし、

販路の拡大にも努めています。

さらには豊橋技術大学のまちなか研究室として一室を貸しており、イベントから始まったソフト中心のまちづくりですが、現在は大学との連携で昔の雰囲気を残しつつも、新しい店舗に改装しようという店舗改修を含めたハード面での景観整備も行われています。

あくまでも『そわか』の理念としては、観光地豊川の商業者の一員としてまちの活性化・コミュニティビジネスを行い自己の経営能力の向上を高め、文化事業・文化振興をとらうしての空き店舗対策、雇用の創出、地域への利益還元、まちづくり会社が地域のランドマーク的存在になることです。

8. 『地域ブランドとしてのいなり寿司』

豊川市と言えばいなり寿司、いなり寿司と言えば豊川市。

たまたま豊川稲荷があったからこそ生まれた歴史的背景がありました。その昔、コメ飢饉の時に油揚げにおからを詰めて、俵の形にして奉納したのが始まりと言われており、いなり寿司を名物にすることは、歴史に基づいた根拠のあることでした。

いなり寿司を名物にするには、各店オリジナルの味や工夫があり、それぞれのお店の腕の見せ所でした。互いの店がそれぞれの工夫をする中で、念願であったB級ご当地グルメ選手権に出場、市全体の盛り上がりで6位入賞を果たし地域ブランドとしても認められる存在となりました。これからも、豊川の名物としてのいなり寿司だけではなく、日本食文化の発展の為にも頑張りたいと思います。

9. 『若者が町に寄せる思い』

幼い頃、自分の庭のように遊んでいた商店街は、色々な店が軒を連ね、たくさんの人が行き来していました。そして、商店街には自分の親のような人がたくさんいました。そんな往来の中で、朝から晩まで遊び回り、イタズラをしては怒られ、またイタズラの繰り返し、商店街とともに成長してきました。歩けば声を掛けられないなんてことはありませんでした。しかし、自分が年を重ねた分、町も通りを歩く人も、もちろん建物も同じように年を取り、活気も薄れ、歩く人も少なくなり、当然のようにシャッターの下りたままの店が増え始めました。そして、そんな現実をイベント（いなり楽市）を通してまちづくりに参加するまで、近所に住んでいながら気にもしなかったし、気付きもしませんでした。

ある親父が『学生や役所の人間、10代から60代の年齢の全く違う人間が毎週集まり意見を出し合い、時には喧嘩や泣き出してしまう人もいる。そんな熱い人間が集まるイベントはどこにもないぞ！』と自慢気に話をしていました。自分から言わせると、町にそんな親父やお袋連中がいること自体が自慢なのです。この人たちと一緒に昔の活気を取り戻そう、この町をなんとかしなきゃという気持ちが伝染してしまう。毎週集まり真面目な話はそこそこに、お酒片手に夜中まで町のことを話し合う。そんなゆるい会合でイベント運営やまちづくりが成り立ってしまうことも自慢なのです。

それでもまだまだ昔に比べると活気も足りないし、人通りも少ない。住民一人一人の危機感やまちづくりに対しての意識もまだまだ足りないと思います。自分と同じように気付かなかった人もいるだろうし、気付いていないフリをしている人もいるかもしれない。そんな人たちをどんどん巻き込み親父達世代の熱い思いを伝染させていきたい。そして、自分の子供にもこの町で育ててもらった良さを伝え、親父世代と協力し、5年後、10年後には誰もが笑顔になれる、誰からも愛される街を目指したいと思います。

10. 『まちづくりは十年スパンで』

私は父親の後を継ぎ、豊川市国府町で小さな和洋菓子店を経営しています。そんな私が、10年前ひよんなはずみで空き店舗対策事業の神輿の上に担がれ、豊川稲荷門前通りにある空き店舗の社長をする羽目になりました。そして、このことを皮きりに、豊川稲荷門前町のまちづくりにかかわることとなりました。

まちづくりとしての空き店舗対策で、どんな店舗をやろうか？と出資予定者の仲間とあれこれ相談した結果、豊川稲荷の門前にありながら、きつねうどんをメイン商品とした店がないということで、うどん店を経営することとなりました。飲食店経営の経験のない私には荷が重いということで、飲食店を多店舗にわたり経営している仲間を巻き込み、彼らに飲食店経営のいろはを教わり、大ききつねうどんと菜めしなり寿司の店を開店いたしました。

いなり楽市での私の役割は、自分が役職を務める組織を通して、人と人を結びつけたり、宣伝の窓口として紹介したりという事でした。

そして、しぶとくまちづくりを続けているうちにマスコミ等が取り上げてくれるようになりました。

まちづくりには『ばかもの』『よそ者』『若者』の3種類の人間が必要だといわれて

いますが、今の門前はそれを十分に満たす状況となっています。

最近では『豊川ばかりがずいぶんテレビに出るが何故だ。』という問い合わせが近隣市から多く寄せられます。ここ1年くらいの間でも、NHKをはじめ、全国・ローカルを含めいくつもの番組で取り上げられています。

4～5年前まではイベント開催時にはびっくりするほどの人が訪れてくれるが、それ以外の日はいつもの閑散とした町に戻ってしまうという状況だったのですが、今では通常の土曜日、日曜日の人出がはっきりと増加してきており、平日の観光客も少しずつ増えてきている状況です。

そして、『いなり寿司で豊川を盛り上げ隊』が豊川いなり寿司で、B1グランプリ厚木大会で、なんと6位入賞を果たしました。

この、『いなり寿司で豊川を盛り上げ隊』という組織は、観光協会、行政、会議所、市内のすし店など幅広くいろんな方が要職に就いており、このような組織体も元をたざせば門前町のまちづくりが原点となり、そこから広がりを見せた結果であります。

まちづくりにかかわり始めてもう10年がたとうとしています。衰退する観光の町で、てこでも動かぬ観光客の減少に向かい、やっても成果がでない3年をみんなで頑張り、少しずつ増え始めたイベントの集客力増をブレイクの兆しと喜んだ3年、そして本当に町が起きてきたと実感できるようになったこの4年、やっと一区切り10年目を迎えようとしています。

本当にみんなが頑張れば地域は活性化するんだという体験ができたことは、自分の人生にとってかけがえのない喜びであり、しあわせであります。これからも頑張ります！

11. 『まちづくりの課題』

町は徐々にではありますが、一つになりかけてはいます。しかし、今後のまちづくりにおいて、これが絶対という特効薬はないということです。

イベント・まちづくり会社・いなり寿司、おかみさん会の活動と何がヒットするかも全くわかりませんし、いくら補助金を頂いても町の活性化に繋がる保証は全くありません。

今、私たちが取り組んでいる事は、

- ①そこに住んでいるからこそできる『歴史を大切にしたいイベントの提案』。
- ②若者から年配者、男女を問わず言いたいことが言え、とことん話し合いができる『週一回の会合』。

③先人の想いをキープし、人に喜んで頂けるよう、常に『感謝の気持ち』を忘れない商売。

全てが思うように進むわけではありません。でも、難しいからこそ楽しみながら、楽しく運営していくコツもあるのではないのでしょうか。

そして、なにより一番大切なのは、自分たちが誰よりも地元を好きになり、自分たちの町は自分たちで何とかして行こうという、一人一人の意識が必要な事です。